

現状と課題

「山海経」研究の現況と課題

小南 一郎

「山海経」が、中国古代の宗教的な文化、特に神話について考えようとするとき、最も基本的な資料の一つになることは言うまでもない。中国古代における「神話的思考」あるいは「宗教的思考」がいかなる特質を持っていたかを追求することが、現在、以前にも増して強く求められているように見える。それは、おそらく、中国の後代の文化が「神話的思考」を排除することを基調として展開したと、少なくとも表面的には見える事から、オーソドックスな中国学研究がいささか行きづまっているように見える現在、逆にこれまで十分には検討が加えられてこなかった部面にも目を向け、中国文化を考える際の暗黙の了解事項となっていたものにも、もう一度、検討を加えようとする大きな流れと対応しているのだとも言えよう。そうした中で「山海経」をいかなる書物だと理解するかは、中国の神話的思考の特質を論ずるための基礎作業として大きな意味を持つにちがいない。基礎になる資料の性格を十分検討しておらぬ議論は砂上の楼閣に類するのである。

「山海経」に対する日本での研究とは言え、すでにこの書物の日本語訳が少なくとも二種類作られており、また論文や評論的な文

章の中でも「山海経」についての言及は、最近けつして少なくはない。しかしそのように「山海経」に関わる人々が、この書物をいかなる性格のものだと理解しているかについては、多くの場合、十分には明かではないと言えよう。自分の仮説につごうのよい条文だけを「山海経」の中から切り取ったにすぎぬのか、あるいは「山海経」に一定のイメージを持っているにしても、それは「怪物事典」的な興味を基礎にしたものを出ないのではないかと推定される場合が多いのである。ある一条の資料の意味は、それを収める書物全体との関係から考えねばならないとするのが「断章取義」を排した近代的な文献操作の基本であるはずであり、またもし仮に「山海経」の基本的性格が「怪物事典」的なものであったとすれば、そうした「怪物事典」的なものに対する興味が古代人の心の中でどのような位置を占め得たかを説明する必要があるであろう。

おおよそ古代の宗教文化をあつかう場合、仮説の上に仮説を重ねて「暴走」し、その結果として導き出された結論は、その論者自身（いささか広く言ってもその信奉者たち）以外には受け入れられる者がないといったことになり勝ちである。古代の文化を扱う場合、個別

的な実証の積み重ねの上に社会の全体像を導き出すには資料があまりに乏しく、やむを得ず、まず一つのモデルを作つて、そのモデルがどの範囲までの現象を説明できるかによつて、他の仮説との優劣を決めるという方法を取らねばならないという場合が多い。それゆえ、そのような理論的な「暴走」も一つの試みであり、全く無駄だというわけではない。しかし、やはり出来るかぎり着実に資料を操作して、確実な結論をめざすことが、研究者の第一のつとめであるにちがいない。その着実な資料操作の第一歩は、それぞれの資料を含む原典の全体的な性格付けから始まるのである。「山海経」についても、凡百の興味本位の紹介よりも、この書物が、いかなる時代に、いかなる人々によつて、いかなる意図を以て編纂されたかの探求にわずかも歩を進めることのほうが、ずっと重要だと言えよう。そうした一歩こそが、やがて中国神話の特質（さらにその背後にある中国古代の「神話的思考」の特徴）の解明につながつてゆくのである。しかし残念ながら、現実にはそうした方向への探究は遅延として進んでいないように見えるのである。

「山海経」は、そのテキストが前漢の末年、劉秀（劉歆）によつて整えられ、東晋の初めに郭璞によつて注が付けられて以後、北魏の酈道元「水経注」がこの書物を多く引用しつつ地名比定を行い、時代が降つて明清時期には少なからざる注釈が作られ（中でも畢沅の「山海経新校正」および郝懿行「山海経箋疏」が重要である）、⁽¹⁾たほか、随筆や割記類にもこの書物の成立ちについての言及は多い。しかし「山海経」について近代科学の視点で総合的に考えようとし

たのは、小川琢治博士の一連の仕事（『支那歴史地理研究』一九二八年、にまとめられている）に始まると言えよう。小川博士は、主として現行本つながる「山海経」のテキストの各部分の形成過程を追求めたのであつて、それをそのまま各部分の内容の成立時代とするわけにはいかないが、現行のテキストの成立の経過を次のように考へた。「山海経」の中で最も古い部分である五蔵山経は、漢以前（春秋戦国時代）に洛陽において成立した。前漢時代には、それに海外四経と海内四経とが加わり、郭璞の注の段階で更に大荒四経と海内一経とが付加されて、現行の十八卷本「山海経」が成立したとするのである。小川博士が、目録類に見える「山海経」の篇数（例えば漢の十三篇、劉秀本の十八篇、郭璞注本の二十三篇など）に就いてつまずきを合せようとするのは、畢沅の方法をおさうものではあるが、断片的な目録の記載を全てうまく説明する必要があるかどうかは疑問である。また小川博士の探求が十分に「山海経」の内容にまで及んでいないところに不満はのこすが、この書物の成立経過についておおよその見通しを付けたことは、おおきな仕事であつたと言えよう。

一九二五年、顧颉剛は「五蔵山経試探」（史学論叢一四）の中で、山経（すなわち五蔵山経）の成立を、春秋末・戦国初とし、作られたのは周・秦の間の地域であろうと推定し、その内容については、山岳祭祀と関係があり、そうした儀礼に関わつた巫覡祝宗がこの書物を作り上げたとの説を提出した。

一九二八年の、陸侃如「論山海経的著作時代」（新月月刊一一五）は、短い文章ではあるが示唆に富むものである。陸氏は、（一）山経

は、戦国時代の楚人の作(一) 海外・海内経は、「淮南子」以後、劉歆以前(二) 大荒・海内経は、劉歆以後、郭璞以前の成立と考える。そうしてとくに山経を、戦国時代の成立と考えるについては、この部分に鉄への言及が多いことや、郡や県といった行政単位の名が見えることを挙げ、また楚人の作と考える根拠として、「楚辭」や「莊子」と内容的に重なることの多いことを挙げている。

このほか解放以前の中國における、「山海経」の成立をめぐる特色ある議論をいくつか取り上げておけば、玄珠(茅盾)が、山経を東周、海外・海内経を春秋戦國の交、大荒・海内経も劉歆以前には成立していたとする説(『中國神話研究ABC』一九二九)を提出し、衛聚賢は、「山海経」はインド(あるいはギリシャ)の影響を受けた作品で、作者はインド出身で中國にやってきた隨單子であろうと推定し(『古史研究第二集』一九二八、鄭德坤「山海経及其神話」史学年報四、の引用による)、また江紹原『中國古代旅行之研究』一九三五、は、この書物を旅行指南の実用書で、多くの人々の地理知識と實際の旅行の経験とが纏められたものと考えている。

第二次世界大戦後、神話研究の方法論の点で様々な試みがなされた西欧の学界に比べて、新中國における神話研究は必ずしも盛んではなく、「山海経」についても、少なくとも文革終了以前には、あまり多くの論考は発表されていない。そうした中であって、記憶にのこる論文として、蒙文通「略論山海経的写作時代及其产生地域」(『中華文史論叢』一九六二)がある。蒙氏は、「山海経」に見える伝説が中原のものとは異なることを指摘し、とくにこの書物の各

部分が意識している中央の觀念に差異があることがら、それぞれの部分を生み出した地域を推定した。その結論だけを挙げれば、大荒経の成立が最も古く、西周前期ごろの巴國での作品、つづく海内経も、西周中期以前のものと、蜀での作品、五藏山経と海外経とは、春秋戦國期の、巴蜀文化の影響を受けた楚國での作品とするものである。この論文を読んだとき、解放以前の中國の学界において、さまざまな異説はありながらも、「山海経」の性格や成立時代について、おおよその合意があったことがら、十分には受け継がれていないことに、強い印象を受けた。私自身は、やはり五藏山経を最も古い内容をとどめるものと考えたものではあるが、ただここで蒙氏が提出した、「山海経」中の各部分の中央の觀念の差異の問題や、あるいはまたこの書物が四方を数えるとき、東南西北ではなく南西北東の順であり、しかも大荒経だけはまた別であったとの指摘は、今後、一層検討を深める必要のある問題点の指摘であらう。

前述のように、解放以来、中國における「山海経」研究は必ずしも振るわなかったのであるが、そうした状況は文化大革命終了後、大きく変化した。袁珂氏の「山海経」の校訂と注釈の仕事(『山海経校注』一九八〇、『山海経校釈』一九八五)のほか、この書物をめぐって多くの論考が発表されるようになったのである。文革後、我々が最初に目にした「山海経」を扱った論文も袁珂氏の「『山海経』写作的時地及篇目考」(『中華文史論叢復刊』一号、一九七八、『神話論文集』一九八二、に再収)であった。袁氏は、この論文の中で特に「山海経」と楚文化との関係を強調し、この作品全体が楚國での成立であると主張した。その成立時期については、大荒・海

内経が戦国の初中期、五蔵山経が戦国中期以降、海内四経が漢代初年のものと推定している（袁氏のこの説は『中国神話伝説』一九八四、第四章にも見える）。袁氏が大荒・海内経を最も古い部分だと見なすのは、この部分の記述がまとまりを欠き、同時にまた神話的な要素が濃厚であるからである。ただ前述の蒙文通氏とは異なり、文体の点や、不死の觀念が見えること、あるいは五蔵山経に鉄についての記述が多いことなどを挙げて、この書物の最も古い部分も戦国初年以前にまでは遡らないとしているのは、蒙氏があまり理由もなく時代を引き上げている議論よりも、説得的である。しかし中山経において洛陽付近の山水の記述が詳細であること（この点が「山海経」が洛陽で作られたとする説の論拠となっている）について、この部分は後人が補ったものだとして無視するなど、いささか恣意的な議論はこびがみえる。

このような大荒・海内経の成立を古く考える蒙氏・袁氏の説に対し、袁行沛「山海経新探」（中華文史論叢一九七八—三）は、五蔵山経を戦国初中期の成立、海外・海内四経を秦から漢にかけての成立と考え、大荒経は海外経の一部、海内一経は海内四経の一部であって、劉歆は校訂にさいしてこれを除いたが、郭璞が再び一つにしたのだと推定する。この袁行沛氏の議論は、大荒・海内経の成立過程については異論もあるうが、おおよそ解放以前からの中国の学界の「山海経」に対する共通した認識に沿うものである。

一九八三年二月、成都において「山海経」學術討論会が開かれた。参加者は歴史学、地理学、考古学、民族学、文学、宗教学、医学の研究者など六十余名。その討論会に提出された論文二七編が

『山海経』新探』一九八六、として出版された。そこに纏められた論文は、参加者が多方面にわたることを反映して、多彩ではあるが、「山海経」自体の根本的な性格については、新しい合意が得られたようには見えない。ただ「山海経」の内容から、その成立地域について、これまで南方の文化と結びつけて論ぜられることが多かったのになんとして、東方の文化、特に戦国時代の齊の文化と結びつけようとする説が提出されていることに注意を引かれる。例えば蕭兵「山海経・四方民俗文化的交匯——兼論『山海経』由東方早期方士整理而成」や何幼琦「海経」新探」などがこの書物と山東地域との關係について考察している。「山海経」の世界觀（特に四海の觀念）と齊の鄒衍の大九州説との間には關係があったのではないかとする説は、たしかに魅力的ではあるが、現在のところそれを確かめる決定的な証拠はまだ示されていない³。また「山海経」と東方文化との關係を示唆するものとして、この書物の中で黄帝とそれに関係する神々が活躍するという点も挙げることができよう。「山海経」と黄帝とに強い結び付きがあることについては、呉晗「山海経中の古代故事及其系統」（史学年報三期、一九三二）がすでに指摘し、「新探」の中でも徐中舒・唐嘉弘「『山海経』和『黄帝』」の論文がそのことを論じている。「山海経」における黄帝の重さは、この書物を南方系のものだと言ってしまうことに對する反論の有力な根拠となるにちがいない。ただ黄帝をめぐる神話伝説の成長過程（その時代と地域）の解明についてはなお多くの努力が今後に待たれている。

『山海経』新探』を読んでの印象は、個別的な事項についての

研究は進んではいても、「山海経」自体の全体的な性格についての探索は、現在やっと緒についたばかりで、個別的な事実と全体とを結び付ける方法も、まだ十分に説得的で嚴密なものが確立されていないように見える。

日本における、「山海経」の性格を探索した研究は、まことに少ない。注目に値するのは、小川琢治博士以後、ただ伊藤清司氏の「山海経の研究」と副題をつけた一連の論考があるだけだと言えようか。伊藤氏の諸論考の中でも「山川の神々」(史学四一—四、四二—一、二、一九六九)は、もっぱら五蔵山経の性格を論じて、

「山経は、古代中国の邑里にくらす人々の民間信仰と、それらにかかわる日々のなりわいの苦悩をふまえて、これに対処せんとする者——おそらくは巫祝たちの儀礼の書としての一面を持つものである」として、人々の生活の舞台である邑里とその周辺を圍繞する、

神怪たちが生息する山川草沢との二つの異質の世界の間の緊張關係の中からこの書物は生み出されたとの説を展開した。この説は、人々の生活を視点として、神怪との関わりの意味を説明しようとした点で、これまでの「山海経」の基本的性格の分析がややもすれば大ざっぱになりがちであったという欠点を補って余りあるものと言えよう。この視点は、伊藤氏の近著「中国の神獸・惡鬼たち」一九八六、でも展開されているが、この書物が一般読者を想定したものであるところから、いささか「怪物事典」的な様相を呈し、本来の主張が薄められていることは残念である。伊藤氏には、「山海経」をめぐって、ほかにも論考は多いが、中でも「山海経と鉄」一九六九、は、示唆するところが大きいものである。

以上、必読の論文や著書で読み落としているものがあることを恐れるのであるが、私が重要だと考える研究成果を列挙してきた。このように他人の説をあげつらった以上、最後に私自身の立場も明らかにせねばならないであろう。私は、「山海経」の最も古い部分(五蔵山経の基本になる部分)は、戦国時代前半期に洛陽で成立したと、ひとまず想定している。もちろんその素材となったものには、より古く遡る要素も少なくないが、「尚書」堯典篇に卜辭の風神の名が留められていることを根拠にその成立を商代安陽期にまで遡らせることができないのと同様に、個々の要素の時代性だけから「山海経」の成立時代を定めることはできない。むしろ基本的な要素が一つに統合され得る時代環境がいつ揃うのかと、いわば下向きに時代を限定してゆく方法が取られねばならないと思う。「山海経」の最初の成立に際しての基本的な要素が何であったかについては議論があるが、その多様な知識にともなう価値観に注目して、戦国時期に入ってから初めてその主要な要素が揃うのである。

洛陽において成立したと考えるのは、すでに指摘があるように、五蔵山経におけるこの地域の記述が特に詳細であるからである。戦国時期、洛陽における周政権は、これまで考えられてきたよりももう少し大きな力を持っていたようである(例えば戦国後半期の中山国の銅器の銘文にも見えるように、中山国の臣下の功績褒賞の場にも周からの使者が遣わされて、それを權威づけているのである)。「山海経」にあって、南方的な要素や東方的な要素が一つに纏められているのも、南方や東方の現地でこの書物が成立したのではなく、多様な要素を一つに纏められるセンターがあったことを示唆し

よう。そうしたセンターとしては、やはり東周の都があった洛陽を想定するのが最も可能性が高いであろう。

「山海経」の最も基礎となる単位は、伊藤清司氏が描き出されたような、四周を非日常的な神怪たちの世界に取り囲まれ、それと緊張関係にありつつ日々の生活が営まれる、邑里社会であったとすることが出来る。ただ「山海経」は、そうした単位が単に並列されているだけではなく、それらが一定の世界構造の中に組み込まれて成立したのである。そうした世界構造への組み込みをおこなったのは、特定の邑里の生活に密着した者ではなく、邑里の生活から距離を取り、相応に広い範囲を平等に客観視できる者たちであったにちがいない。そうした存在として想定できるのは、なんらかの形で政治機構と関わりを持った巫祝たち（原始的な方士たち）の集団であろう。「山海経」に見える巫術が、日常生活の周期的な儀礼ではなく、危機に対処する呪術に限定されていることも、この書物の成立に関わった巫祝たちの性格を示唆しよう。

そうした巫祝たちが持っていた自然科学的・呪術的技術が直接に反映しているのが五蔵山経である。たしかに五蔵山経の内部にも微妙な質的差異が存在し、それぞれの部分の素材の来歴は一つではなかったことを窺わせはするが、しかしその統一された文体に見えるように、この部分が強いまとまりをもって形成されたことは確かである。むしろ問題は、この五蔵山経とそれ以後の部分（「海経」と総称される）との結合が必然性を持ったものであったかどうかである。同じ文化的な基盤から生み出されたにしても、この二つの部分の結合は多分に偶然性を帯びたものであったとも考えられる。し

かし私自身は、海経の神話的な要素の強い内容も、やはり五蔵山経のなかにその元となるものがあって、五蔵山経のそうした要素こそが、巫祝たちが邑里のせまい共同体の中にあつたのではなく、政治的な存在であつたことの反映であつたと考えたいと思う。そのことを最もよく示唆するのが、「山海経」の背後にあつた地理観・世界観である。例えばある範囲の山々を一つの連なりとする觀念は、距離や方向にいささかの問題はあるにしろ、現実の山々の連なりに基づきつつ、しかしそれは共同体的な生活の範囲を大きく越えて、その遠い末尾は神話的な山々につながってゆくのである。神話的な存在は、現実の邑里の生活の外側を取り巻く山沢の神怪たちの世界の、さらにその外側に配されており、そうした要素がこの書物の後半に特に多く見られることは、巫祝たちが政治的な場に次第に深く取り込まれていったことを反映するのだと言えよう。おおよそ神話というものは、常になんらかの意味で、現実の体制を権威づけるものなのである。

以上に、きわめて大ざっぱで、しかも私のせまい視野から見たものにすぎないが、「山海経」研究の流れを記し、あわせて今後の課題についてもいささか考えてみた。「山海経」は、強い主張をもって纏められた書物であると思う。それは、例えば中山経に洛陽近辺の山川を詳しく記述しながらも、洛陽という都市の存在については一言も触れていないことから知られよう。編者たちの視点に興味本位のものであつたなら、都市の繁華さにいささかなりとも引かれるところがあつたはずである。しかしこの書物の強い主張の意味す

るところを、我々はまだほとんど理解しておらぬのではなからうか。それを理解するためには、中国古代人の想像力はかくの如きものであったといった風に評論的に「山海経」を取り上げるのではなく、この書物の成立過程の探求に向けて一步でも確実な前進をすることが待たれているのである。一見、空想的な内容を盛ったように見えるこの書物を正しく理解するためには、他の書物と同様に、あるいはそれ以上に、中国古代の現実の社会と生活とに対する確かな把握が不可欠なのである。

注

(1) 清末までの「山海経」研究の過程については、容肇祖「山海経研究的進展」(民俗一一六期、一九三三)が簡潔に纏めている。

(2) 「山海経」の伝説と古代インド・ギリシャの伝説との關係を考へようとした論文として、最近のものとしては、孫培良「《山海経》拾正」(人文雜誌叢刊四期、一九八五)がある。

(3) 「山海経」と郷衍とを結び付ける議論は、すでに何観洲「山海経在科学上之批判及作者之時代考」(燕京學報七期、一九三〇)があり、これには鄭德坤の批判が寄せられている(燕京學報同期、また鄭氏『中國歷史地理論文集』一九八一)。(京都大學助教)